

## 戦争から学んで……

坂元中学校 三年 西郷 李保

「智恵子会いたい、話したい、無性に。」

この言葉は、「第二十振部隊、穴澤利夫大尉、二十三歳」の男性が大戦時代に将来を約束した婚約者に宛てて書いた手紙の一部です。

私はこの長い夏休みを使って、昨年から行きたいと思っていた知覧特攻平和会館に母と二人で行って来ました。行ってみると、たくさんの方が訪れていました。私は、いろんな人の写真、手紙、遺品などを見ながら、周っていました。見ていると、先ほど紹介した穴澤利夫さんの手紙を見つけました。この手紙を読んでいると、目が涙でいっぱいになりました。なぜかという手紙にはこんな風に書かれてあったからです。

「あなたの幸を希ふ以外には何物もない。あなたは過去に生きるのではない。勇気をもって過去を忘れ、将来に新活面を見出すこと。穴澤は現実の世界にはもう存在しない。」

これはだいたい省略してあります。この文面を見た時は、もう涙が滝のように流れてきました。また、穴澤大尉は最後に、

「今後は明るく朗らかに。自分も負けずに、朗らかに笑って征く。」  
と言っています。私には、まるでこれから戦争に行く自分に勇気づけているかのように感じました。

あと、もう一つ感動する特攻隊員が書いた手紙があります。それは「加藤虎男少尉、十八歳」の手紙のお話です。加藤少尉は母に宛てて書いていました。ですが、その母とは実の母ではありません。加藤少尉が六歳のときに引き取ってくれたそうです。その手紙の中で、私の心にジーンときた文を紹介します。

「遂に最後迄『お母さん』と呼ばざりし俺 幾度か思ひ切って呼ばんとしたが何と意志薄弱な俺だったらう 母上お許しく下さい。さ

ぞ淋しかったせら今こそ大聲で呼ばして頂きます お母さん お母さん お母さん

この手紙を見た時は、驚きと悲しみが混ざったような感情でした。一緒に母も見ていたのですが、母は目を赤くして泣いていました。きっと今頃、加藤少尉は天国で「お母さん」と呼んでいることでしょう。

私は、この知覧特攻平和会館に行ってから、少し戦争に対する気持ちが変わってきました。今、国会では平和安全法整備法についていろいろと問題となつています。国民はこれに対し、「反対」という意見の方が多くとよくニュースで出ています。私はこの案に対し、「もし、他国から攻められた時に自国を守るためには必要だと思っけど、今のままで平和に暮らしていきたい。」

という賛成でも反対でもないという両方の意見を持っています。国民が理解するために国会がどのように動くのか早く知りたいです。

これからの日本はいったいどうなるのでしょうか。あの怖い戦争を体験した方々が、だんだんと少なくなつてきています。だからこそ、今私たちが戦争について学び、そして知り、後世に伝えていくべきだと私は思います。わたしは二度と、あのような何も悪くない人々が大勢になくなつてしまふことは絶対にあつてはいけないことだと思ひます。また、多くの方々のおかげで、今の生活があると言つても過言ではないでしょう。なので、無駄に命を捨てたり、人の心を傷つけてしまつたりするような行為は絶対にしてはいけないことだと思ひます。わたしは今ここに誓ひます。人を傷つけるような行為をしないということ。そして、もし自分に子供ができた時は、戦争の恐ろしさを伝えてあげたいです。また、知覧特攻平和会館に一緒に行きたいです。

戦争でなくなった多くの方に  
「あなた方が残してくれた日本をこれからも保つていきます。」  
と伝えたいです。